総選挙について

2017.12.18　南雲

1）

今回の総選挙については、『朝日新聞』10月26日号に掲載された小熊英二「総選挙の構図」が基本的に的を射ていると思う。私風に言えば、以下のようになる。

“結果を出せていない”などの理由によりかげりをみせていたとはいえ、都議選段階では「小池ブーム」は残っていた（東京は無党派が多い）。しかし、「都民ファースト」の勝利にとって決定的だったのは、公明党の動向であった。ところがマスコミは、この本質をみず、都議選も所詮は地方選挙であることを忘れ、“「受け皿」があれば、「安倍一強」体制を倒せる”と論じたのである。「野党共闘」論者も、これに従った。

「希望の党」の立ち上げに際して、マスコミは、それが「受け皿」になるかに持ち上げた（私の周りの一般大衆はすでに白けていたが）。しかるに、「排除」発言が出るや、小池バッシングを始め、ブームの失速を報じたのである。マスコミは、「希望の党」ブームを煽り、また自らそれを沈静化したのであった。

小熊氏の批評は、自公の固定票3割、リベラル（共産党を含む）の固定票2割、残りの5割が無党派層（棄権を含む）であることを前提としている（2009年以降のデータ）。単純に考えて、投票率が5割であれば、自公の勝利は必然である。民主党が勝った2009年総選挙の投票率は、約7割であった。非自民・非リベラルを謳った「希望の党」が勝つには、9割の投票率が必要だったことになる。

〈保守二大政党など幻想である〉（小熊）。

立憲民主党の“躍進”は「リベラル」層の底堅さを示したものといえるが、我々は、「リベラル」層の中における反共産主義・反左翼の増加に着目すべきではないか。共産党は、「野党共闘」路線のもと、「リベラル」化を余儀なくされ、「リベラル」に埋没した。

ちなみに、中核派は杉並で、旧社労党は横須賀で候補者を立てたが、得票数はともに3000票ほどであった。

2）

新開氏の総選挙総括は、〈安倍自民への不信は受け皿があれば勝利し得る〉（「民進党解体の過程と希望の党の本質」P.1）とあるように、マスコミの論調に同調しているように読める点が不満である。

また、新開氏は、繰り返し世界的な左派の登場を強調しているが（「今選挙の結果と今後の課題」P.3）、〈日本においても左派・急進派の潮流が登場するかどうか〉（高原氏の「立憲民主党と衆院選挙について」）こそ、議論すべきではなかろうか。

新開氏は、結論として「方向転換」が必要であるという。それは、㋑立憲民主党との「連携」→左傾化、㋺「3・11以降登場してきた直接民主主義を希求するグループ」および「貧困と格差の格差に抵抗する『社会的労働運動』を志向するグループ」との共闘→「『地域』での基礎的政治勢力の形成」、を内実としている。

これについては、〈バックボーンに革命党派が必要〉との高原氏の指摘が正当だと思われる。ただ、前のコメント（末尾に添付）でも述べたが、高原氏にあっては「人民」概念があいまいであり、それ故に便利な用語となっている。「人民闘争」と「市民運動」を並列化できるのだろうか？

なお、新開氏は「天皇制ファシズム」という用語を無規定に用いている（「今選挙結果と今後の課題」P.3）が、いかがなものか。「天皇制」にしろ「ファシズム」にしろポレミークな用語であり、かつ、“民主主義はファシズムか”などという情緒的な言説が生まれているのであるから。

3）

「青春＝反権力」が妥当した時代などあったのだろうか？　大勢は、“巨人、大鵬、自民党”ではなかったか？

〈自民支持の若者が多い〉というのは印象による評価が含まれていると思うが、それはさておき、『共産主義運動年誌』2017年号所収の幾瀬仁弘論文「いま、ここにあるコミュニズム」は参考になった。幾瀬氏は、「危機が生み出した四つの主体形象」を示している（P.145～150）が、今の「若者」は、生まれた時からこの形象をまとわされているのである。

余談になるが、日本では革命が起こらなかったことを、もう少し真剣に考えるべきではないか。統治イデオロギーでいえば、西洋の「神」、中国の「天」にあたるものが、日本にはない。『孟子』は日本には入ってこなかった、という伝説があるという。つまり、孟子のいう易姓革命を、日本は拒否したというのである（天皇には姓がない）。

かつて、スターリン主義的な「史的唯物論」が、「神の啓示」、「天命」の機能をはたしたこともあった。我々は、革命の正当性・正統性をいかに説くべきなのか？